

現代のアメリカ文學

高橋 龍彦
垣 田 口
松 直
太 直
高 太郎

共編

日文

現代のメカ文藝學

高松垣雄
龍口直太郎
杉木喬

共編

三省堂刊

昭和十六年 五月十五日 印刷
昭和十六年 五月二十日 發行

現代のアメリカ文學
⑩ 定價二圓五十錢

編者

高垣松雄
龍口直太
杉木喬

發行者

東京市神田區神保町一ノ一
株式會社 三省堂
代表者 龜井豐治

印刷者

東京市蒲田區仲六郷一ノ五
株式會社 三省堂蒲田工場
代表者 喜多見昇

不許複製



發行所

東京市神田區神保町一ノ一
振替東京三一五五五
株式會社 三省堂
大阪市西區阿波座下通二ノ六
株式會社 三省堂大阪支店

(アメリカ文學)

目次

第一篇 序 説

- 1 アメリカ文學の發生と展開……………高垣松雄……………三
- 2 アメリカ文學の發展と獨立……………西川正身……………一五
- 3 アメリカ文學の精神……………志賀勝……………三七
- 4 アメリカ文學の理解と受用……………高垣松雄……………四七

第二篇 現代アメリカ文學

- 1 小説(大戰後より二十年代の終り迄)
 - i リアリズム及び自然主義を中心として……………龍口直太郎……………六一
 - ii ネオ・ロマンティズムに就て……………佐久間原……………六四
- 2 評論……………濱田政二郎……………一九
- 3 演劇・戯曲(主として大戰前後から二十年代迄)……………杉木喬……………三一

i	劇壇……………	一三
ii	戯曲作家……………	一四
4	詩(大戰前後より三十年代迄)……………	安藤一郎…一六〇
第三篇 今日の文學・その展望と動向		

1 小説

i	藝術派……………	細入藤太郎…一五五
---	----------	-----------

ii	大衆的作家……………	山屋三郎…三一
----	------------	---------

(附)	世界大戰後アメリカ小説中のベスト・セラーズ……………	二五三
-----	----------------------------	-----

2	演劇・戯曲(一九三〇年代を中心として)……………	平井豊一…二五九
---	--------------------------	----------

3	アメリカ現代文學とジャーナリズム……………	山屋三郎…二七九
---	-----------------------	----------

4	アメリカ文學と映畫……………	清水光…二九一
---	----------------	---------

5	アメリカ演劇と映畫……………	清水光…二九七
---	----------------	---------

附 録

1	アメリカの文學賞……………杉	木	喬……………三二
2	日本に於ける現代アメリカ文學の文獻と翻譯……………三三		
	執筆者紹介……………三三		
	あとがき……………	龍口直太郎……………三七	
		杉木喬……………三七	
	索引……………1		
			20

第一篇 序

說

1 アメリカ文學の發生と展開

高 垣 松 雄

一

「アメリカにおける文學は三百餘年の歴史を持つが、アメリカ文學が開花したのはつい昨日のことである」と暫く前に一批評家が言つた。換言すれば、十七世紀の始め植民地文學として出發したアメリカ文學が、今世紀になつて漸くイギリス文學の支配、廣く言つてヨーロッパの傳統から獨立して、世界文學の間に確乎たる地位を占めるに至つたといふのである。この事實は、アメリカ文學を理解するに當り、先づ心に留めておいて然るべきであらう。

次に、アメリカにおける文學は、歴史を持つとはいへ僅かに三百餘年に過ぎず、他の多くの國々に比してその歴史はいかにも淺い。そこには神話もなければ民間の傳承文學も見られない。封建社會の桎梏もここまでは及んでゐない。それはどこまでも近世社會の所産である。アメリカ文學のこ

の若さは、これまた記憶しておかねばなるまい。

イギリス人のアメリカ植民は、一六〇七年、ジェイムズタウンを中心として開拓された南部アメリカのヴァージニア植民地が最も早く、北部にあつては、それより稍遅れて一六二〇年、史上に名高いピルグリム・ファーザーズがプリマスに上陸し、やがてマサチューセッツ州を中心にニュー・イングランド諸州の植民地が樹立された。南部の話は暫く措くとして、當時ニュー・イングランド諸州を統一した精神は、その神學的内容をカルヴィニズムに負ふところのピューリタニズムであつた。尤もピルグリム・ファーザーズの一行百二名の中、眞に宗教的信念から移住して來た者はその三分の一であると言はれ、他は主として經濟的な動機を有してゐたと推定されるところに、ピューリタニズムと對立する所謂ヤンキーの發生を認めねばなるまい。また同じ清教徒と言つても、ピルグリム・ファーザーズは分離派ディセンタイズに屬してゐて、比較的自由寛容の精神を示したのに對し、眞正なカルヴィニズムの精神はボストンを中心とするマサチューセッツ灣植民地（一六三〇―一四〇年に互に清教徒の「大移住」によつて開かれた）に傳はつたといふ事實も見逃してはならない。しかし、かうした注目すべき諸事情があるにも拘らず、右に言つたピューリタニズムが神政政治シオクラシーを打ち建て、十七世紀を通じてニュー・イングランドを支配し續けたことは何等變りがないのである。

それでは初期のピューリタニズムがどのやうなものであつたかと言へば、それはカルヴィンの説く

ところに従つて豫定説を信條とし、すべて人間はその運命ばかりか、その行爲も神の豫定し給ふところであり、人間は原罪を負ふてゐて、若干の者のみが神に選ばれて救はれると考へる。而して人間には自己の行爲を決定する自由は些かも與へられてゐない。つまりは人間を極端に邪惡なものに見做し、人間が救はれるのもその善行にはよらず、全く神の恩寵によるとするのである。この考へ方からすれば、人間は神の榮光のためにのみこの世にあるのであり、それ故日常生活にあつては、常に自己の魂を吟味し、隠れたる罪を見出しては懺悔によつてそれを贖はんとする禁慾的な生活態度を守ることになる。かうした態度は、ニュー・イングランドの嚴しい自然と闘つて行くには必要でもあり、好都合でもあつたらうと考へられる。しかし、文學の立場から考へる時、その根柢に横たはる人間觀は文學の成長を妨げるものと言はねばなるまい。事實、清教徒の社會では文學と宗教とは略同意語であつた。代表的な清教徒の一人コトン・マザー (Cotton Mather, 1663—1728) は、「すべて歴史を讀むに際しては、時折適當に讀む手を休めて、それぞれの事件に榮光の神の御手がいかに働いてゐるかを考へよ」といふ意味のことを言つてゐる。僅かに一例ではあるが、清教徒の讀書に對する態度、ひいては文學に對する態度を凡そ察することができよう。彼等清教徒にとつて、文學の審美的な方面は全然問題ではなかつたのである。かくて十七世紀のアメリカには吾々の考へるが如き文學は固より望むべくもなく、僅かに宗教的文學、歴史的記錄の類、日記、若干の詩が見

られるばかりで、ブラッドフォード (William Bradford, 1590—1657) の『プリマス植民史』、ウィンスロップ (John Winthrop, 1588—1649) の『ヒュー・イングランド史』、コトン・マザーの『ニュー・イングランド教會史』及び『見えざる世界の不思議』 (*Wonders of the Invisible World*, 1693). 等は當代の代表的著作であり、韻文の方面では、ウィグルスワース (Michael Wigglesworth, 1631—1705) の『審判の日』 (*The Day of Doom*, 1662) と題する千八百行の長詩、獨立以前のアメリカが生んだ天成の女流詩人ブラッドストリート (Anne Bradstreet, 1612—72) の『第十人目の詩神』 (*The Tenth Muse*, 1650) を挙げれば十分であらう。

ところで十七世紀も末に近づくに従ひ、既に初期の植民者の間に見られたヤンキーの分子が次第に清教徒に取つて代る勢ひを示し始めた。その具體的な現はれとして、一六八九年、從來教會員にのみ許されてゐた参政權が、財産上の資格によつて與へられることになつた。これは神政政治が崩壊し、罪と罰を説く牧師に代つて、實利實益を旨とする中産階級の擡頭を意味する。十八世紀にはいと、主に經濟的動機による移民が續々海を渡つて來り、西部の奥地を開拓して所謂開拓線フロンティアを擴げて行つた。之等開拓者達は清教徒社會に平等化の影響を與へた。更に宗教思想としては、海の彼方に起つた理神論デイズム (宗教から不可思議な要素を取り去り、理性が眞なりとする若干の教條のみを認めるもの) が新しい宇宙觀を教へ、清教徒の信仰の據り所を搖がす一因となつた。約言すれば、理性の世紀十八世紀は、アメリカ社會においてピューリタン勢

力の衰微、ヤンキー勢力の隆盛を見たのである。この衰へ行くピューリタニズムを擁護すべく、最後の牙城を死守したのがジ・ナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards, 1703—58) であつた。彼は内なる光の價值を信ずる神祕主義者で、主著『意志の自由について』(On the Freedom of the Will, 1754)その他を著はし、精緻な理論を用ひて初期カルヴィニズムの信條を説くのであつたが、結局舊時代と運命を共にせざるを得なかつた。ピューリタニズムは既に過去のものであつたからである。序でながら、初期のピューリタニズムは理性の前に敗れ去つたとは言ふものの、その精神は現はれる形こそ違へ、今日尙もアメリカ人の間に根強く残つてゐることを、ここで特に斷はつておかねばならない。エドワーズと對蹠的な存在、新時代の代辯者にはフランクリン (Benjamin Franklin, 1706—90) がある。蠟燭屋の息子として生れ、後には州代議員・郵政長官にまで出世した彼は、堅實・勤勉・常識・俊敏・自恃等々中産階級の諸徳を身に備へ、現世的功利の生活を體現した點でヤンキーの最もよき典型であると言へる。文筆の方面では、平易で明快な『自叙傳』(死後出版、一八一七年。信憑は、一八六八年のこと)の外、吾々にも親しい諺が多く見出される『貧しきリチャードの出世曆』(Poor Richard's Almanac, 1732—57) が好評を博した。

アメリカの獨立(一七七六年、十三州獨立を宣言す)は言ふまでもなく重大な事件であつた。アメリカはこれを機會に、國民的意識が高まり、植民地的劣等感を揚棄する第一步を踏み出したわけであるが、獨立前後の時

代には、當然のことながら文學よりも先づ政治であつた。その意味で今日讀まるべきものは、トマス・ペイン (Thomas Paine, 1737—1809) のアメリカ獨立の趣旨を明かにしたパンフレット『常識』 (Common Sense, 1776) 及びトマス・ジ・ファスン (Thomas Jefferson, 1743—1826) の起草にかかる獨立宣言書であらう。韻文の方面にしても諷刺詩・愛國詩が多く行はれた。ただフィリップ・フレノー (Philip Freneau, 1752—1832) のみは、政治詩も作りはしたが、その自然詩はアメリカ最初の詩らしい詩と言はれ、そこにアメリカ浪漫主義の第一聲を聞くことができる。

二

獨立戰爭を境にアメリカは全く新しい時代を迎へた。國土の上から見ると、一七九一年ヴァーモントを聯邦に加へ、續いてケンタッキー、テネシー、オハイオの諸州を編入、一八〇三年にはルイジアナ(後、十四の州に分かれた)をフランスから譲り受けて領土を倍加し、一八一二年の第二次對英戰爭は、戦ひに敗れたものの、却て新たに獨立を確保した結果となり、爾來年を追うて國土を擴大して行つた。經濟的には、産業革命の影響があつて、資本主義に基く新しい經濟組織、産業主義の發展を見た。未開拓の自然的資源が求められ、土地の投機が盛んになり、開拓線は移住民の激増と共に愈々西へ西へと擴がつた。舊アメリカの靜的な社會理想は打ち棄てられ、代つて「進歩」が自然の第一

法則と認められるに至つた。宗教について言つても、十八世紀末に起つたユニテリアンの運動はニ・イ・イングランドの宗教界における自由主義の運動と解することができる。かやうに十九世紀前半のアメリカは、何處を眺めても革新の氣運、言つてみれば青年期の奔放な若々しさが漲つてゐた。ここにロマンスの精神の發現を見たのも事の當然と言ふべきであらう。固よりアメリカ浪漫主義は、その源泉を辿ればルーソーにこれを求めることができようが、それよりもアメリカ自體の社會情勢を直接考察した方が遙かに判りが早い。アメリカ浪漫主義はやはり生るべくして生れたのである。かくして人々は人間性の善なること、人間が進歩の可能性を具へ、内に神性を宿すことを固く信じた。彼等はオプティミストであつた。アメリカ文學はここまで來て始めて、一時に花を咲かせたかの如き壯觀を呈するのである。

アメリカ浪漫主義は最初ニュー・ヨークを中心として榮え、アーヴィング (Washington Irving, 1783—1859)、クーパー (James Fenimore Cooper, 1789—1851)、フライアント (William Cullen Bryant, 1794—1878) の三人がこの時期を代表する。アーヴィングは、彼ほど周囲の現實に背を向けた者はないと言つて非難する人もあるが、確かに彼は美しい過去にあこがれ、ロマンスの夢を追ひ求めはした。しかし、アメリカの文學者として誰よりも先に英文壇に受け入れられた榮譽は彼に與へねばならず、また、『スケッチ・ブック』(The Sketch Book, 1819—20) に收めた「リップ・ヴァン・ウィ

ンクル」(Rip Van Winkle)その他の短篇によつて、アメリカ短篇小説史上、先驅者として彼の占める地位を認めるに各かであつてはならない。尙彼は英本人の公正を缺いたアメリカ觀を嘆く一方、英國のものを單に英國のものなるが故にこれを讚美し模倣することのなきやう、自國の人々を戒めてゐるが("English Writers on America")。これはアメリカに眼覺めた國民的意識を早くも反映するものと見做すべきであらう。クーパーは長篇作家として知られ、獨立戰爭當時の歴史に取材した『スパイ』(*The Spy*, 1821)アメリカ土人を主人公にした五部作『革轡物語』(*The Leatherstocking Tales*)が有名である。彼の作品は人物の取扱ひ方に缺點はあるが、サスペンスに富んでゐて愛讀する者が多い。バルザックはその一人であつた。「アメリカ詩歌の父」の呼ばれるブライアントには、「死觀」(Thanatopsis, 1817)「水鳥に寄す」(To a Waterfowl, 1821)「森の讃歌」(A Forest Hymn, 1825)等の佳品がある。何れの作品にも宗教的・道德的な色が濃く出てゐるのは、彼の生れ育つた清教徒の環境からして無理からぬことであらう。

一八三〇年頃から南北戦争(一八六一—六五)に到る世代は、アメリカ文化史において最も光輝ある時期であると言はれ、この時代の文化的指導權を握つたのがボストンであつた。ボストンの黄金時代は、ホーソーン(Nathaniel Hawthorne, 1804—64)・エムソン(Ralph Waldo Emerson, 1803—82)・ロー(Henry David Thoreau, 1817—62)の如き輝かしい名前を誇ることができる。ホーソーン

は殆んど常に人間性の暗い面のみを問題に取上げ、その懐疑的な態度には古き清教徒を思はせる點が多々あるが、新時代の人としては寧ろ消極的な存在であつた。代表作の『緋の文字』(*The Scarlet Letter*, 1850) は、姦通の罪を表はす赤いAの文字を胸に縫ひつけた女主人公をめぐる嚴肅な物語で、背景となる十七世紀の植民社會が、決して寫實的であるとは言へないにも拘らず、アメリカ小説全史を通じて數少い名篇の一つであらう。この外短篇集『トワイストールド・テールズ』(*Twice-Told Tales*, 第一輯一八三七年
第二輯一八四二年)、長篇『七破風の家』(*The House of the Seven Gables*, 1851)、『プライズデール・ロマンス』(*The Blithedale Romance*, 1852) など、何れも一讀すべき味ひ深い作品である。ホールンに比べるとエマソンは遙かに積極的な意味を持つてゐる。アメリカ浪漫主義は、彼を中心とする「超絶主義」(*Transcendentalism*) に於いて全き成長を遂げたと言ひ得る。「超絶主義」はその説く人々によつて必らずしも内容を同じくしないが、大體において、人間の魂は神性であつて宇宙の魂と同一であり、従つてより大なる魂の持つすべてを内在的と有するが故に、自己を好み、自己に潜在する諸素質を實現すべきであるといふのである。明かに徹底した個人主義の思想であつて、懷疑の影の些かもないオプティミズムが明瞭に看取される。エマソンの所説は、「自然論」(*Nature*)、*「自恃」* (*Self-Reliance*)、*「大靈」* (*The Over-Soul*) 等どうかができるが、*「自恃」*を説いて最後の據り所を本能に求め、自然を論じて人間の可能性を無限なりとする超絶主義者エマソンに